

蔵相時代の津島先生のこと

津島蔵相の秘書官時代の思い出を綴った一文で、昭和四十六年十二月に執筆。『硯滴』に初出。のち『津島寿一追想録』にも収録

それは終戦後間もない昭和二十年九月のある日のことであつた。

当時津島先生は東久邇内閣の蔵相であられたが、私は津島蔵相から、マッカーサー元帥に面会したいので、終戦連絡部を通して司令部の都合を聞くように、との指示を受けた。その通り取計らつたところ、数日して司令部から応諾の返事があつた。

ところが元帥が大臣との会談日として指定された日は、生憎、日本の祭日に当る、たしか九月二十三日の午前十一時であつた。私はその旨大臣に申上げると、意外にも大臣は、折角だが自分はその会見は断ることにするから、その旨先方に返事するよつにいわれるのであつた。

私は、大臣の意中を解しかねて、全く当惑した。大臣は当時の最高権力者との会見、しかも自分から申し出られた

会見をわざわざ断られるというのである。考えられないことである。私は当惑した面持で、大臣にその理由をただしたのである。

大臣が言われるには、凡そ西洋で人に面接の日取りをアポイントする場合には、日曜とか祭日は遠慮するのが礼儀である。マ元帥ともあるう方がそんなことをされる筈がない。これは何かの行き違いではないか。

もしこれが本当だとしたら、日本はなるほど敗戦国ではあるが、自分は天皇陛下から御親任を受けた國務大臣である。従つてこの措置は自分に対すると同様、日本国に対する非礼であると思つから断るのだと言われたのである。

そこで私は、「御意見は一応御尤もに存じますが、私は断るべきではないと思います。何となれば、今日、日米の間には未だ戦争状態は終結しておりません。いわば元帥は占領軍司令官として戦場にあるようなものです。もともと戦場には日曜も休日もありません。元帥が幕屋において貴方に引見しようとしておられるのは、先方の敬意と好意を示すもので、むしろ感謝するべきことだと思ひます。」と進言した。

大臣は不承不承、私の進言を容れられて、司令部(現在の第一生命本社)の七階にあつたマ元帥の執務室に行かれた。

待ちかまえていたバンカー副官は、涼しい微笑を浮べて、大臣を迎えられ、「実は昨日の午前十一時に元帥は貴大臣をお待ち受けしておりました。」と言われるのであった。見る見るうちに大臣の顔色は明るく朗らかになられ、連絡の手違いから日を間違えた非礼を丁寧に詫びられた。バンカー副官は大臣を抱えるように元帥の部屋に導き入れられ、大臣と元帥は、通訳抜きの水入らずの小一時間に及び会見を行われたのである。話題の中心は、当時困窮の極にあつた食糧難の打開に関するものであつたようだ。

会見を終え、エレベーターを降り、お堀端に出て車上の人となつた津島蔵相は、大変御機嫌がよかつた。そして元帥の副官として、この会談を親切にとりなしてくれたバンカー大佐のとられた立派な態度を繰返し賞讃されるのであつた。しかしお隣りに坐つておる不骨な大平秘書官に対しては、ついに一言も慰勞の言葉がなかつた。その日は清澄な新涼を思わせる快晴の日であつたが、私は淡い嫉妬に似た感じを、バンカー大佐にもつたことが、昨日のこのように思い出されるのである。

もう一つ鮮明に思い出されることがある。それは昭和二十年十月一日のことであつたと思つた。

マッカーサー司令部は、突如として、朝鮮銀行と台湾銀

行を閉鎖する旨日本政府に指令したのである。その指令を受け取りに出向いた方は、式村金融局長（丸龜中学に在学したゆかりのある人）であつた。

式村さんが司令部から大蔵省に帰つて来られた時は既にその日の夕刻であつた。大蔵省では、直ちに津島蔵相を中心に省議が開かれた。

大臣はまずその指令を何らの留保もつけないで持ち帰つてこられた式村局長の方を向かれて、きびしい表情で次のように注意された。

「今閉鎖されようとする両銀行には、数多い預金者がおる筈だ。その中には寡婦もおれば孤児もあるにちがいない。その人達は、明日からの生活を考へて、今宵はまんじりともせず不安におののいていることだらう。自分であれば、司令部に居居つて、預金者の身になり、閉鎖後の経過措置を十分打合せた上でなければ帰らない。行政にはそうした責任感と思ひやりがなければならぬではないか。」

その一言の注意がきつかけとなつて、大臣は、山際次官（後の日銀総裁）以下大蔵省の幹部に、日頃鬱積していた不満を次から次へとぶちまけられるのであつた。

省議が長くなり疲れてくると君達は時折お互に腕時計を

見たりするが、それは仕事に真剣味を欠いておる証拠である。会議が偶々深更に及ぶと、心ここになく、ただ帰心矢の如き風情がありありと見えるのは、君達が国家の非常時に不謹慎であるからだとかいふ類の訓旨であった。

その夜の省議もそのような大臣の多くの訓旨を交えて、延々数時間に及んだ。夜が更けるにつれて秋の夜気はいよいよ冷涼の度を加えてきた。そこで秘書官たる私も、次官以下幹部の手前、たまりかねて、一向に席を立とうとされない大臣を強く促して、当時大臣が寄寓しておられた碑文谷の石川邸に帰ってもらった。大臣と私が床についたのは既に午前三時を過ぎていたように思う。

翌早朝七時頃であったと思うが、石川邸の門を叩く音に目を覚ました私が、玄関に出て見ると、そこには山際次官と愛知文書課長（後の外務大臣）が立っていた。御二人は前夜一睡もしないで、その閉鎖指令の問題点を整理し、当面の善後措置を考え、それを英文で綴ったのを持参の上、大臣の指示を求めに來られたのであった。

私がおそるおそる大臣の部屋のみすまを開けて御二人の來意を伝えた時には、大臣は既に羽織袴姿で端然と机の前に正座されていた。しかもその机の上は当日の大蔵省各局の主要な仕事の段取りを筆でしたためたメモが数枚既に出

來上っていたのである。

私人としての津島先生は、やさしい人間味と多彩な趣味を持たれた方であられたが、公人としての津島先生は、そのようにきびしい、折目の正しい、義務感の強い方であったのである。